

外部評価を終えて

2021 年 10 月 15 日

第四期外部評価委員：原田園子、中野孝幸、辻 洋、由本陽子

神戸女学院大学第四期外部評価委員は、大学全体と各学部学科研究科、部署、委員会、センターの 2016 年度～2020 年度中期目標・計画の活動、2020 年度の年度別と評価項目別活動の自己点検・評価の評価をいたしました。各外部評価委員による点検・評価結果は、2021 年度活動計画評価報告書（中期計画、A 表、B 表）に記載しております。ここでは、各委員から寄せられた全般的な感想や意見、提案から特記すべきと思われる事項を示させていただきます。

昨年の年明けから顕著になってきた新型コロナ禍のため、新年度の教育研究活動に多大な支障・困難が生じた 2020 年度は大変なご苦勞のあった年だったと思います。予定されており準備が整えられていた行事、活動やプログラムは、中止あるいは延期せざるを得なくなったり、変更し新たな工夫を凝らすことにより実施へと運ばれていったことが報告書に示されています。感染拡大防止の措置をとりながら、学院と大学の総力を挙げて短期間で整備し、遠隔授業という形で新学年度の講義が開始されたのは、また、その他の教育活動、チャペルアワーや各種の学生指導・支援・サービスもリモートによって実施することが出来たのは、教職員の皆様の努力と精力的な活動の賜物です。

“2020 年度の振り返り 重点項目” に挙げられ報告されている授業関連（ハード面とソフト面での学生と教員サポート）、学生支援（緊急支援金、奨学金等の給付）、他、学生への便宜を図った一連の事柄は、教育機関として当然な事なけばならなかったことかも知れませんが、構成員一同が一丸となって協働しなければ実施され得なかったことですし、小規模大学でこその細やかな配慮も感じられます。

【中期目標・計画に関して】

1. 2016 年度～2020 年度の中期目標・計画の実施・達成に関する自己点検・評価活動と新たな 5 年間の中期目標と計画案についての学内での点検・評価は概ね適切に行われています。2021 年度からの新たな中期目標・計画については、部署や委員会によって若干の差がありますが、概ね過去 5 年間の目標・計画に基づいて成しえなかった点を盛り込み PDCA サイクルにのせて立案されていると思われます。

2. 新型コロナ禍状況での活動について、あくまでも本来の活動の在り方のみを視野に入れ「アフターコロナには再開する予定」との計画を述べただけで、残念ながら、まだ2, 3年は続くとも指摘されているウイズコロナ状況での新たな手法での活動の可能性の検討がなされていない部署もありました。（これは年度別活動評価報告書と評価項目別点検評価報告書にも見られました。）今しばらく続くと思われる新型コロナ禍状況での教育上の問題や課題は、限られた4年間という教育課程で、学生たちに神戸女学院大学ならではのミッションステートメントと教育ポリシーに基づく学びを享受させるために、打開、解決していかなければならないことです。
3. 加えて、新型コロナ禍対策として、昨年度来進めてこられた授業、会議等のオンライン化や図書館の様々なサービスなどは、アフターコロナにおいても有効な用途があるはずですから、是非その点を見据えた計画も立てていただきたいと思います。
4. 目標・計画案に具体性がみられない箇所があります。「見直す」「検討する」といった表現だけで抽象的な記述に終わっているのです。（この点も年度別活動評価報告書や評価項目別点検評価報告書にもみられました。）目標が具体的に示されていなければ、次年度に評価を適切に行なうのが難しいのではないかと思います。

出来ればどのようなKPIを設定しているかを計画に明示できないでしょうか。数値目標を掲げるのが難しくても、具体的に何をどのように改善することを目指すのかを記載すべきではないでしょうか。構成員の意識を高める上でも、明確な目標をもとに年度ごとの事業計画を立案すれば、PDCAを回すうえで具体的な議論が深まると思われます。

【年度別活動評価報告書と評価項目別点検評価書に関して】

1. 志願者減、学生数減の問題

2020年度末に実施された入学者選抜試験結果による2021年度4月の新入学生数の激減に関する件ですが、志願者増を目指しての2021年度以降の活動について入学センターの広報活動以外に何らかの検討を重ねておられると思います。新型コロナ禍での感染リスクの回避、移動制限規制などから受験生の志願パターンが大きく変化している可能性もあり得ますので、今後は高大連携、オープンキャンパス、広報強化などの従来の施策だけではなく、柔軟な対策も考える必要があると思います。

一方、新型コロナ禍だけでは説明ができない点もあると思われます。文学部および文学研究科における入学者の定員割れに対する対策は、それぞれの学科、専攻内だけではなく、学部さらには大学全体で取り組むべき重要な問題だと思われます。カリキュラム編成の改革や広報活動など、種々の方策がなされてきたことは評価できますが、残念ながら、これらに芳しい成果が見られていない現状を鑑みると、英文学科と総合文化学科両者間のより親密な協力体制が必要ではないでしょうか。

2. 研究活動について

研究活動を活性化するための具体的な方策についての記載がみられません。また、現状の分析についても具体的記述がありません。評価報告においては、教員や院生の研究活動の現状を示す資料などを公開し、計画の基盤とするのみならず、個々の意識を高めることも必要ではないかと思われます。

(各研究科、及び、研究所委員会、女性学インスティテュート委員会など)

「事業報告書」の基本データには、各大学の特徴があるので必ずしも必要ということではありませんが、研究に関するデータおよび社会貢献に関するデータの記載がないことが気になりました。経年変化とともに部局ごとのデータを可視化するなど工夫されては如何かと考えます。

3. 財務について

財務面では、2020年度は新型コロナ禍の影響で収支両面で特異な構造になっています。遠隔授業の増加、緊急支援給付金、学生寮閉鎖等の影響はやむを得ませんが、受験者、入学者減少の影響が2021年度以降に顕在化します。学生、教職員への支援を止めることなく、かつ一定の収入減の中での財政収支バランスの確保は非常に厳しい局面にきています。暫く続くであろうウィズコロナ時代に向けて、入学者の増強を含め、従来の収支構造の在り方を見直し、新たな自己点検の視点を設けては如何かと考えます。

4. 根拠資料について

評価の根拠として提示されている資料が成果を示すものとして十分だとは思えない項目が散見されます。例えば、「教育課程・学習効果」について、カリキュラム編成や学習効果を上げるための様々な方策がなされていることに対して、学生のアンケートだけでなく、実際の教育成果が判断できるような資料が示されるべきではないでしょうか。

【その他の意見・提案】

1. 2019 年度から掲げた国際化ビジョン、地域連携ビジョンは、緒についた所で新型コロナウイルスのパンデミックに襲われ今期は意図した成果にまで至りませんでした。今後はウイズコロナの時代が続くと言われており、自ずとビジョンの実行モデルが大きく変わらざるを得ません。2021 年度以降はそれらを考慮した新たなアクションプランを掲げる必要があるのではないのでしょうか。
2. 設定された計画と直接関係なくとも、ステークホルダーが関心を持たれる指標について経年変化を点検・公開してはいかがでしょうか？ 例えば、①留年者数・中退者数 ②大学院進学について、内部進学と社会人入学の内訳 ③学生の隔地と近隣地の内訳 ④留学状況の経年変化 ⑤学生の授業アンケート集計結果など。何を公表するか自体も点検項目だと考えます。
3. 卒業生、修了生によるアンケートを実施、分析されていますが、過去 5 年間の中長期計画・評価において、アンケートを時系列に並べて分析することで、いくつかの計画についての学生目線からの評価点検になると思いますので、まだであれば分析されてみては如何でしょうか。

最後に、新型コロナ禍の 1 年余りを経て、試行錯誤や創意工夫をすることで、教職員、学生ともに、これまでには経験したことがない「どんな境遇でも生き抜く力」を身につけたことと思います。学生にとってはきっと生涯の糧になると思います。それだけに密かに悩んでいる学生がいないか、神戸女学院大学ならではの、目配りをされまして、引き続き、組織横断的なサポートをされていかれますように、願っております。

以上